御盃　五拾　　水野出羽守

但御盃、内之方菊壽、印籠之わく成菊壽字、厚切金にて致候も有、やすり粉にて致候も有之、十枚ヅヽ、五通りに替り、裏にも竹之蒔繪有之、

〔茶道筌蹄五〕盃之分

萩の繪　原叟好、大小二ッ重ね、朱刷毛目に、黑漆にて萩の摸樣、

釼　原叟好、朱二ッ重ね、裏に黑漆にて釼を書く、

飛石　原叟海部屋善次方にて、黑にて飛石をかゝれしを、今に寫し來る、朱の一枚盃なり、

〔簾中舊記〕正月御はがためやうだい

御かたくちにて、九こん參らせ候、此御盃はつぼき物にて候、三の御さかづきもまいり候、

〔賤のをだ卷〕扨盃もうすければ、さのみ酒も過ず、馳走ぶりも能樣にしたり、今は享和頃酒の手へかかり、衣類の爲にならぬ所に計氣が付て、盃もふかくこしらへ、略中辨利にのみ成行て、雅なることも風流なることもなし、

〔萬歲狂歌集六雜〕鮑貝のかたつくれる盃を出しければ

此貝を手にとりえしはわたつ海の底なし上戸あまならねども

〔和漢三才圖會三十一庖厨具〕杯音背　盃同　坏同　和名佐加豆岐略中

按、坏初用瓦器、故名酒土器サカツキ、止與都通出於城州深草者良、河州龍目タツノ次之、日本紀云、神武天皇取香久山埴土作平瓮、以祭神祇、平瓮、卽今之瓦器類、今亦神酒、婚儀、嘉祝、皆用瓦器、然厭破易、尋常用木杯、多朱髹、釼鐔、描金、撒金等甚華美也、

〔續世繼四小野の御幸〕かざみきたるわらは二人、略中いま一人は玄ろがねのおしきにこがねのさかづきする、て、大かうじ御さかなにて、いだし給へりければ、御ともの殿上人とりてまいりて、い

盃種類以原質爲名